

〈歴史パネル〉

1931年のポンド危機と金本位停止

名古屋大学 金井 雄一

イギリスにおいて危機が生成・拡大し、ポンドが金本位停止に追い込まれていく過程を、以下の諸要因に着目しつつ把握してみたい。まず前提として、1925年金本位「復帰」以降の国際収支状況および旧平価（1£＝4.86\$）での「復帰」が持った意味を確認する。次いで背景として、1929年のアメリカにおける恐慌から始まった世界的大不況のイギリス経済への影響を、貿易外収支や財政支出などを中心に一瞥する。そのうえで、1931年5月からの大陸ヨーロッパにおける金融的混乱のロンドンへの波及や7月の『マクミラン委員会報告書』公表などを踏まえて、8～9月におけるイギリス当局の対応を整理してゆく。そしてそれらを通じて、1931年ポンド危機は、ポンドの信認喪失によって外為相場の維持が不可能になったという事態であったのは確かだとしても、同時に、外為相場下落危機を緊縮政策によって克服しようとするのが困難になってきたことを示すものでもあった、ということを一層明らかにしたいと思う。

[参考文献]

金井雄一『ポンドの苦闘—金本位制とは何だったのか—』名古屋大学出版会、2004年。